日本福祉大学社会福祉学部
『日本福祉大学社会福祉論集』第 146 号　2022 年 3 月

リモートセッションにおいて浮かび上がる音楽療法の「思い込み」の作用

―― ミュージック・ケアのフィールドワークをもとに ――

西　島　千　尋

要　旨

本論文の目的は，「生／ライヴ」以外の音楽が「ほんもの」の「代替品」とみなされがちであったこれまでの傾向において，新型コロナウイルスの感染拡大によって普及したリモートによる音楽療法の実践の意味を整理することである．

そのためにまず，リモートによる音楽の授業や，音楽療法のリモートセッションの実例を参照し（第 1 章），次に音楽療法の一手法であるミュージック・ケアのフィールドワークをもとにリモートセッションの実体を明らかにする（第 2 章）．音楽療法のリモートセッションには対面にはないメリットが認められつつあるが，本論文ではリモートセッションでより明らかとなった音楽療法の「思い込み」の作用に着目することで（第 3 章），音楽療法の本質を再考する．

キーワード：音楽療法，リモートセッション，複製技術，芸術の真正，ミュージック・ケア

序

画家のオリジナル作品や，作曲家の直筆の楽譜に驚くような値がつけられるように，芸術分野では一般に「ほんもの」にこそ価値があり，それ以外は「コピー」や「再現」「代替品」とみなされる傾向がある．音楽の分野においても，「生／ライヴ」以外の音楽が「ほんもの」の「代替品」とみなされる傾向にあった．特に，『音楽社会学序説』（1970，平凡社）などで知られる，ドイツの哲学者 Th. アドルノのポピュラー音楽批判の影響は長きにわたって大きく，一般の人々は「商品」を消費することしかできない存在と見なされてきた．後に，音楽学者の細川周平（1990）がアドルノの理論的な矛盾を整理し，「複製技術でも音楽を美的に経験することはできる」と主張して以降，その風潮は緩和されている．

だが細川が「複製技術でも音楽を美的に経験することはできるのか」と問うていること自体が，複製技術（当時の媒体は主にレコード）による音楽経験に向けられた怪訝な眼差しを物語っていると言えよう．理論的にはアドルノが論破されたとは言え，その後も「生演奏こそがほんもの」という価値観がないとは言えない．

しかし，新型コロナウイルスの感染が拡大する現代においては，Web会議サービスZoom（Zoomビデオコミュニケーションズ，以下Zoom）やモバイルメッセンジャーアプリケーションLINE（LINE株式会社，以下LINE），YouTubeなどの媒体による，オンラインイベントの開催が実施されるようになった．音楽療法も例外ではない．音楽療法は高齢者や障害児・者の入所・通所施設等でセッションが行われることも多いが，重症化のハイリスク者でもある彼らのもとに第三者が入ることが懸念され，中止を余儀なくされるケースも多い．そこで音楽療法でも，リモートセッションが試みられるようになっている．

しかし，複製技術による聴取が「生演奏」の下位に位置づけられてきたように，リモートによる音楽経験もまた，ライヴやコンサートの代替品なのだろうか．本論文では，筆者が2015年から続けている音楽療法の一手法である「ミュージック・ケア」（ミュージック・ケアについては後述）のリモートセッションに特に着目し，音楽療法がリモートで行われることの意味を考えたい．リモートで実施されることによって，音楽療法の何が可能で，何が可能ではないかを問うことは，音楽療法の本質に迫ることにも結びつく．

1．音楽教育および音楽療法のリモートによる実践

本章では，音楽療法の隣接分野とも言える音楽教育のリモート授業についての報告を整理する（1-1）．また，音楽療法のリモートセッションについては，日本音楽療法学会誌の特集（2021年8月），および2021年9月25日～10月20日にWeb開催された第21回日本音楽療法学会学術大会において報告されたリモートセッションの事例を参照する（1-2）．

1-1. 音楽教育におけるリモート授業

新型コロナウイルスの感染拡大以前も，音楽教育分野では，オンラインやICTの活用に関する研究がいくつかみられる．深見友紀子らによる弾き歌い学習のためのeラーニング教材についての研究や，田中健次による電子黒板とデジタル教科書の活用事例，初山正博によるICTの音楽科への貢献についての提言，田中功一による弾き歌い学習のためのネットレッスンの活用の研究や，大木まみこによるタブレット端末の録画機能を活用した試み，齊藤忠彦による遠隔授業の教育的効果の検証などである．だがこれらは主に，限られた授業時間をより効率的・効果的なものにするための，補助的な位置づけと捉えられていた．

新型コロナウイルスの感染拡大以降は，大学や短期大学で，それまでの対面授業がリモート授業として実施されたため，リモート授業そのものを問う報告がほとんどとなった．それらのう

ち,「実技系の授業では，対面授業が全てにおいて上手くいくと考えられ，デメリットばかりが露呈した」と述べる足立広美（2021，p. 23）の報告以外は，リモート授業のメリットについて述べられている.「表 1」は音楽実技を伴うオンライン授業に関する報告を一覧にしたものである.

表 1：新型コロナウイルス感染症拡大以降のオンライン授業に関する報告（2021 年 10 月現在）

報告者（年）	報告対象の授業：主な内容	オンラインツール	主たる内容
安藤江里（2020）	大学「音楽（歌唱）」「音楽の歴史と鑑賞」：読譜および理論，弾き歌い	Microsoft Teams	・対面ではしにくい質問を気軽にできる. ・やり取りの履歴が残るため学生個々の状況把握に役立つ. ・学生の姿が見えないため反応をキャッチできない.
日高まり子（2020）	大学「保育内容指導法（音楽表現）」「子どもの音楽活動」「ピアノ声楽Ⅰ」など：弾き歌い実技と理論	Zoom によるオンデマンド配信および同時双方向型授業	・視聴覚教材の提供による理解度の向上. ・身体表現活動の恥ずかしさの軽減. ・感性的な理解の深まらなさ. ・他の学生の様子がわからないことからの焦燥感.
舘岡真澄（2020）	大学「音楽Ⅰ」：弾き歌い実技と理論	Microsoft Teams による資料・課題提示型およびオンデマンド型，リアルタイム型レッスン	・自主練習時間の増加. ・受講生たちの即時反応や暗記（暗譜）の能力，表現力の伸び.
足立広美（2021）	大学「授業のためのピアノ」	Zoom によるオンライン授業	・デメリットばかりが露呈した.
門脇早聴子（2021）	大学「初等科音楽科教育法」：弾き歌い	Microsoft Teams による同時双方向型授業およびオンデマンド型授業 One drive 経由の動画のアップロード（学生の課題）	・緊張せず本来の力を発揮できた（受講生の感想）. ・録音録画の繰り返しにより演奏を改善できた（受講生の感想）.
大澤理紗（2021）	大学「音楽実技Ⅱ」：保育実践のためのピアノ演奏	Google Classroom を使用したオンデマンド配信 Zoom を使用したリアルタイム配信	・自主練習時間の増加. ・家族に自分の演奏を聞かれる緊張や恥ずかしさ. ・強弱や音色の指導の限界. ・指導の公平性を保つことの難しさ.
山内信子（2021）	短期大学「音楽Ⅰ」：ピアノ演奏と弾き歌い（コード伴奏法の実技）	Zoom	・他の受講生の不在により緊張せずにレッスンを受講できる. ・他の受講生の様子がわからないことから生じる不安.

リモート授業のメリット

「表 1」にまとめたように，何名かが練習時間の増加を指摘している．これは，たとえば舘岡

(2020) が指摘するように，緊急事態宣言による外出自粛で，練習に割くことのできる時間が増えたという背景もある．一方で，対面授業で実施されていた実技試験の代わりに，実技を録音や録画で提出するという代替措置により，いわゆる「一発勝負」でなくなったこととも関係しているようである．録音や録画では，失敗したり，納得がいかなかったりした場合には撮り直しが可能なため，テイク2，テイク3と重ねるプロセスで練習時間が増えたのである．また，実技試験に限らず，他の受講生の前でレッスンを受けなかったことにより，緊張がなくなった，自分のペースで受講できたということもメリットとしてあげられている（日高2020，門脇2021，大澤2021，山内2021）．

リモート授業の課題

一方で，他の受講生の様子がわからなかったため，「自分だけかなり遅れているのではと不安になることもあった」「自分はどのぐらいすれば良いのか分からない」（山内2021, p. 65）といった不安も生じている．また，大学ではなく，自宅や下宿で受講することによって生じる課題もある．たとえば，リビングなど家族との共有スペースで受講した際の「リビングにピアノを置いているため（他の家族の）生活音が入り込んでしまう」，「ピアノを使用するために家族に部屋を空けてもらうなどの配慮が必要」などの意見や，家族に自分の演奏を聞かれる緊張や恥ずかしさが指摘されている（大澤2021，p. 73）．

個々の受講環境が異なることも課題である．大澤は，「弾いている姿勢の全体像を写せるように配置できる学生もいれば，手元を写すことに手一杯となる学生もいることから，指導の公平性を保つのが難しいと言える」と指摘した（2021，p. 76）．筆者もリモート授業を経験したが，受講生によってはピアノやキーボードを持たない者もおり，集合住宅では隣近所への騒音となるとの懸念から音を出せないという受講生もいた．紙鍵盤や無料でダウンロードできるピアノ鍵盤アプリケーション等の使用を呼びかけたものの，それらの利用と実物のピアノやキーボードの使用の差は大きい．

また，指摘されたメリットはリモート授業でなくとも可能なものであると言える．ピアノやヴァイオリンなどを学んだ経験のある者にとっては，自分の歌唱や演奏を録音・録画することは非常に一般的な学習方法であるが，対面授業でも課題の提出を録音・録画で行うことは可能である．「表1」にあるように日高や門脇は，範奏などの動画配信により受講生の理解が深まったことを指摘しているが，動画の配信も対面授業でも可能である．

さらに「表1」にもあるように，複数の報告が，他の受講生の目を気にしなくても良いという理由から「緊張せずに受講できた」ことをメリットとしてあげているが，こうした受講環境が，必ずしも教員の考える教育効果には結び付きにくいという山内の指摘は重要であろう（山内2021，p. 66）．音楽実技は，言うまでもなく園児や児童・生徒との音楽実践のためのものである．いずれ園児や児童・生徒，他の保育士や教師と共に音楽実践を行うことを考えると，他の受講生がいない，個人のみの環境の快適さが，将来的に有益かどうかわからない．このように整理する

と，音楽実技を伴うリモート授業にはこれから考えられるべき課題は多いと言えよう．

次に，音楽療法のリモートセッションを取り上げた先行研究を整理する．

1-2. 音楽療法のリモートセッション

『日本音楽療法学会誌』21 巻 1 号（2021 年 8 月，日本音楽療法学会）では，「コロナ禍の音楽療法」という特集がくまれた．その巻頭言で二俣泉が「今や「遠隔」は，対面音楽療法の単なる「代替」ではなく，必要不可欠な方法の一つとなっている」と述べているが（2021，p. 4），特集によせられた報告はいずれもメリットに言及している．もちろん，タイムラグが生じるため同時演奏がしにくいことや，楽器の共有ができないなどのデメリットはあるものの，たとえば白川ゆう子が「遠隔での実践には「対面音楽療法の代替」にとどまらない意義がある」と述べるように（2021，p. 15），リモートによる音楽療法実践は肯定的に捉えられている．そこで本節ではリモートによる音楽療法のメリットを整理する．

対象者のリモートセッションへの集中

まず着目するのは，対象者のリモートセッションへの集中である．オーストラリアで音楽療法を行う名郷泉は，Zoom による個人セッションの事例を報告している．対象となるアニカ（自閉症と軽度知的障害，9 歳）とアラン（知的障害，自閉症の傾向がある，22 歳）に関して，名郷および両親は，画面に集中できないだろうという理由からリモートセッションへの参加は難しいと考えていた．だが，アニカもアランも参加でき，対面の時には部屋の中を歩き回ることの多かったアランにいたっては，椅子から立ち上がることもほとんどなかったという（2021，p. 7）．またアランは，「遠隔セッションでの一つ一つの活動への集中と反応は対面の時以上」であり，継続する中で模倣できる動きが増え，一つの活動に集中できる時間も長くなっているという（2021，p. 8）．

名郷が事例としているのは，知的障害や自閉症の子どもおよび青年であるが，アメリカの施設や高齢者グループなどで実践を行う小沼愛子も，「対象年齢に関わらず，対面時より集中できるクライエントが見られる」と指摘している（2021，p. 44）．小沼はその理由として，「パーソナルスペースが保たれる事で集中しやすい」こと，「画面の方が集中しやすい」ことをあげている．「画面」への集中については，白川ゆう子（2021）による自閉スペクトラム症の児童の実践や，生野里花（2021）による介護つき高齢者ホームの要介護入居者を対象としたリモートセッションでも，同様の内容が報告されている．

白川と生野の両者に共通するのが「枠」「フレーム」という言葉である．白川はコンピューター等のディスプレイは「枠」が区切られており，対象児が注目すべきところが明確になっているため，注目しやすかったのだろうと推測している（2021，p. 13）．生野も，音楽療法士が「モニターのフレームの中に常に収まっている」ために，要介護入居者がよく見聞きすることができるようになったと述べている（2021，p. 34）．

白川は先行研究から，自閉スペクトラム症の人が，物事の細部の特徴を優先的に処理する「細部集中型」の情報処理を行うことや，刺激の特定部分へ注意を向けることで，数多くある視覚情報の入力を制限し情報処理負荷を減少させていることを指摘し，ディスプレイという「区切られた枠」の，細部集中型の情報処理という特性に着目している（2021，p. 13）．情報が制限されることで情報処理が容易になるというのである．白川はまた，「今までできなかったことがオンラインでできるようになって，本当にビックリした」という保護者からの感想を紹介しているが（2021，p. 14），こうした現象には，リモート時に「枠／フレーム」が区切られることが関係していると言えるだろう．

画面におけるパーソナルスペースの可動性

次に紹介するリモート音楽療法のメリットもまた，「枠／フレーム」による情報の制限と関連している．名郷が紹介する，カズミ（聴覚障害と口蓋裂，7歳）のセッションの事例では，対面時よりもリモートセッションの方が積極的で，「それまでにない活発なディスカッションによって一緒にセッションを作り上げていくことができた」という（2021，p. 8）．名郷は，リモートは対面セッションで得られる空気感や温もりの共有がないことはデメリットだとしつつ，同時に空気感が緊張や不安につながる対象者にとっては，威圧感や緊張感をさほど感じずにすむことで「対面よりも少ないプレッシャーで人間関係を築くことのできる一つの方法になりうる」と述べている（2021，p. 8）

名郷は，「外部刺激が限定されていることにより，お互い相手に集中しやすく人間関係を構築しやすい」とも述べるが（2021，p. 9），このことは，知的障害や自閉スペクトラム症に限らず，高齢者にも共通するようである．生野はモニターに近づいてきたり手招きするなど，「（対面時と比べ）より親密な言動をする方もあった」と述べている（2021，p. 34）．

また，先にも述べたように，小沼が対象者がリモートセッションに集中する理由に，「パーソナルスペースが保たれる事」をあげていたが，リモートセッションでは各々が落ち着くことのできる距離を選ぶことができる．生野は，ある高齢者が，モニターに映り込まない位置に椅子をずらしたうえで普段より大きな声で歌ったというエピソードを紹介していたが（2021，p. 34），これも「パーソナルスペースの確保」と捉えられるだろう．

また，先に引用した「巻頭言」で，二俣が「遠隔でなければ支援ができない人もいます」と呼びかけたように（2021，p. 4），身体的な事情や病状等によっては，対面のセッションに参加しにくい人もいる．平田紀子は，ユニット型特別養護老人ホームで，8名に制限した対面セッションを，同時にZoomで各フロアに配信する「ハイブリッド方式」について報告しているが（2021，p. 19），Zoomで配信することで「居室で過ごす利用者にも音楽が聴こえ，心身状態を問わず参加できる」ようになったという．

音楽は時間芸術であるという言い方がされるが，リモートセッションでは空間は共有できないものの，時間は共有できる．たとえば寝たきりで起き上がることのできない人も，タブレット等

の画面と通信環境があればセッションに参加できるのである．

音楽療法におけるリモートセッションの可能性

また，「表 2」は 2021 年 9 月 25 日～ 10 月 20 日に Web 開催された第 21 回日本音楽療法学会学術大会でリモートセッションについて報告された発表の一覧である．加藤美知子の大学 3・4 年生を対象とした音楽療法実習のリモート実施についての発表では，リモートのメリットも認めつつ，対面実習のメリットが強く主張されていた．また橋本明子の発表では，発達障害の特性や段階によってはリモートセッションの実施自体が難しい子どももいることが指摘されている．

一方で，伊志嶺理沙および井上知美の精神病患者を対象としたセッションでは，ドロップアウトしてしまう対象者についてと同時に，リモートで積極的になる対象者や，リモートだからこそ参加し続けられている対象者について報告されている．

以上のように，デメリットや制限はあるものの，あらゆる対象者に対して，音楽療法のリモートセッションには「対面音楽療法の代替にとどまらない意義」があることが共通の認識となっている（白川 2021）．名郷は，アイコンタクトや握手などの社交が難しい対象者の場合は，最初から対面でセッションを行なうのではなく，あえてリモートセッションを実施するのも良いのではないかと提案している（2021，p. 7）．

また，白川はリモートセッションを受けた対象児の保護者 8 名にアンケートを実施し，「対面音楽療法ができなくなった場合，再び遠隔音楽療法を希望するか」と尋ねたところ，スタッフ側に対する「申し訳ない」との配慮から「悩む」と回答した 1 名を除き，7 名が「希望する」と答えたことを報告している（2021，p. 14）．小沼も，2021 年 3 月に，「今後対面式に戻れる状態になってもリモートセッションを続けて欲しい」という依頼があったことに言及しているが（2021，

表 2：第 21 回日本音楽療法学会学術大会におけるリモートセッションに関する発表

発表者（所属）	演　題	主な発表内容
加東恵（青少年活動交流センター）	コロナ禍における IT を活用したセッションの試み―介護者のレスパイトを目指した Zoom と Youtube の活用（ポスター発表）	・アルツハイマーの母親と，介護を行う娘が対象． ・満足度は，特に Zoom のセッションにおいて高まっていったことが報告された．
加藤美知子（ゆーらいふ横浜）	リモート音楽療法実習の試み―1 年を通しての経緯を振り返る	・大学 3・4 年生を対象とした音楽療法実習の Google Meet および Zoom によるリモート実施．主な内容は歌唱や伴奏，身体活動の技術習得，グループによる小セッションの実施，音楽療法の事例の紹介． ・大学生にはリモートでも現場に出るための力が身についた． ・大勢の前で話すことやリードする経験ができなかったこと，現場で失敗から学ぶという経験ができなかったこと，リアルな体験がないことをデメリットとして指摘．

白鳥紀美子 （しらとり音楽教室）	LINEグループトーク機能を活用した歌唱活動の一例―コロナ禍における高齢者の活動低下防止と繋がり維持の模索	・LINEを通して合唱グループ（60～80代）のメンバーにYoutube動画を配信し，動画を観ながら，LINEでのカウントダウンをもとにメンバーが各自歌う．歌唱終了後はLINEで感想をやり取りする． ・規則正しい生活の軸・孤独感の軽減・体力の維持につながり，情報交換の場になった．
釣吉美 （介護老人保健施設レインボー）	つながりを継続するための録音データでの音楽提供－コロナ禍における施設職員との連携から（ポスター発表）	・認知症高齢者の施設に，鑑賞・BGM目的の録音音楽，職員からの要望により身体運動目的の録音音楽，発表者の歌と語りの録音音楽を段階的に提供． ・施設では他の行事等が実施できないため，録音提供が職員にも利用者にも肯定的に受け止められている．
伊志嶺理沙 （特定非営利活動法人クレインハウス）	コロナ禍における精神科GHでのオンラインを活用した遠隔集団音楽療法の試み（1）―Zoomアプリを用いた実践―（ポスター発表）	・共同生活援助を行う通過型の精神科グループホームの利用者が，交流室に集ったり，居室から各自参加したりするかたちでZoomを通じセッションに参加．金属製楽器の音が拾えないことやタイムラグについて言及． ・Zoomの操作ができずまったく参加できない人や，ドロップアウトした参加者，心理的負担により途中退出する参加者がいた． ・対面時より感情表出が増え積極的になった参加者もいた．
井上知美 （特定非営利活動法人クレインハウス）	コロナ禍における精神科GHでのオンラインを活用した遠隔集団音楽療法の試み（2）―Zoomアプリを用いた実践―（ポスター発表）	・共同生活援助を行う通過型の精神科グループホームの利用者が，交流室に集ったり，居室から各自参加したりするかたちでZoomを通じセッションに参加． ・金属製楽器の音が拾えないことやタイムラグについて言及． ・集団の中の特定の対象者Aを事例とし，A氏が，人との距離を一定に保ちつつ負荷の少ない環境で他者とかかわることのできるZoomによる集団音楽療法に積極的な意味をみいだし，継続を願っていることを報告．
杉原千幸 （特定非営利活動法人フリー・あ・ステージ）	COVID-19の休業対策とリモート療法導入の検証について ― リモート療法での相互のやり取りの質の低下について考える	・在宅の高齢者や障害者を対象とした音楽療法を実施する事業所における，音楽療法士向けのリモートセッションについての研修． ・タイムラグや音響の課題，複数の音楽療法士によるチームワークの重要性やハンドサインの導入について報告．
橋本明子 （認定NPO法人 発達わんぱく会 こころとことばの教室こっこ）	児童発達支援事業所におけるリモートセッションでの発達段階に即した効果的なプログラムについて―太田ステージ評価と認知発達特性による考察	・ノードフ・ロビンズ音楽療法の考えをもとにした，独自の発達障害の子どもを対象とする療育プログラムのリモートによる実施． ・Zoomで事業所と個々の家庭をつなぐ，もしくは事業所に一部の子どもが参加し他の子どもは家庭で参加するハイブリッド型を実施． ・発達障害の特性や段階によって，画面上に注目できない，保護者の補助が必要，多動性衝動性の高い児童は注意が動転しやすく，セッション以外の刺激に影響を受けやすい子どもがおり，子どもによっては，リモートのセッション自体が難しいことを指摘．

p. 44)，リモートによる音楽療法のセッションは実践者側からも対象者側からも，肯定的に捉えられていると言えよう．

以上を踏まえ，次節では，音楽療法の一手法であるミュージック・ケアのリモートセッションに着目する．

2．ミュージック・ケアのリモートセッション

2-1. 対象とするリモートセッションの概要

「ミュージック・ケア」について

筆者が 2015 年よりフィールドワークを行ってきた音楽療法の一手法「ミュージック・ケア」は，障害児教育のパイオニアでもある加賀谷哲郎のメソッド「加賀谷式集団音楽療法」を直弟子の宮本啓子氏が「ミュージック・ケア」として体系化したものである．1996 年に日本ミュージック・ケア協会が設立され，現在では約 2,600 名の会員が所属している．公式ホームページでは「音楽の特性の一部を利用した，その人がその人らしく生きるための援助活動です．子どもの場合はその子どもの持っている力を最大限に発揮させ，発達の援助を行います」と説明されている．

「ミュージック・ケア」のメソッドについては別の論文でも記してきたため，ここでは詳しく述べないが，特徴の一つに録音媒体（主に CD）の使用があげられる．創始者の加賀谷が，自身は音楽大学で学んだ経験をもちながらも，音楽療法は専門家でなければやれないという考え方に否定的であり，むしろ対象者と生活を共にする「養護施設に勤務している保母さんとか，特殊学級や養護学校の先生方」こそが（加賀谷 1972，p. 35)，子どもたちと音楽療法の実践をするべきだと考えていた．そこで加賀谷は，自身が障害児のために作った曲などをソノシートに吹き込むことを始めた．加賀谷の理念にもとづき，ミュージック・ケアでは CD が用いられることが多いが，録音の使用は，リモートにおけるアコースティック楽器の音の拾いにくさや，演奏のタイムラグがあまり問題にならないため，リモートセッションへの移行をスムーズにしたと考えられる．

対象とするリモートセッションの概要

今回，対象とするセッションは，A 県 B 市の社会福祉法人 C が運営する 5 つの施設 Z・Y・X・R・Q で行われたものである（「表 3」参照)．施設 Z，施設 Y，施設 Q では利用者の密を避けるため 2 グループにわけてセッションが行われている（Z1・Z2，Y1・Y2，Q1・Q2 と表記する)．施設 R も利用者は 2 グループにわかれているが，同日同時間に会場をわけてセッションが行われている．また，詳しくは「表 3」を参照されたいが，リモートセッションで使用される媒体は LINE もしくは Zoom である．

これらのセッションをリードするのは，日本ミュージック・ケア協会認定指導者の浜田陽子氏

（仮名）である．本論文では，2016年3月9日に行った浜田氏へのインタビュー（インタビュー2016と表記）および2021年8月16日に行ったインタビュー（インタビュー2021と表記），また浜田氏がセッションについて記した記録およびセッション後に主にLINEでやり取りした浜田氏のメッセージも適宜用いる．

浜田氏とC社会福祉法人とのかかわりはすでに12年になる（以下インタビュー2016）．1970年生まれの浜田氏は，ある都市の公務員として就学前母子療育通園施設に勤務していた際に，研修の一つとしてミュージック・ケアに出会った．他の音楽活動では子どもがうまくできないと母親がつらい思いをしてしまうが，ミュージック・ケアでは母親も一緒にたのしむ姿があったことから，ミュージック・ケアの実践を行うようになる．その後，知的障害者施設に異動してからも，余暇活動として設けられていた「音楽」の時間にミュージック・ケアを続けていた．結婚を機にA県に引越したことからC社会福祉法人の施設Xで働くようになり，そこでは浜田氏が自らミュージック・ケアをさせてほしいと申し出たという．

浜田氏は，「やってみたら，（施設Xの）職員さんたちが楽しかったんだと思うんです」と述べるが（インタビュー2016），C社会福祉法人はその後，法人が経済的に負担をし，職員がミュージック・ケアの研修を受講できるようにした．浜田氏は2年弱でA県から引越すことになったため，引越し後は月に1度，県外から通いセッションを行なってきた．その頃から，C社会福祉法人の施設X以外の施設Z・Qでもセッションを実践し，のちに開所されたYおよびRにおいてもセッションを実施している．法人とのかかわりが10年を超える頃の2020年春に新型コロナウイルス感染症が拡大し，2020年4月にはセッションが中止になった．

表3：筆者が参与観察を行ったリモートセッション

	日　時	ツール	対　象
3-1	2021年7月6日	Zoom	施設Y1の利用者13名と職員
3-2	2021年8月2日	LINE／Zoom	施設Z1の利用者14名と職員
3-3	2021年8月3日	Zoom	施設Y1の利用者13名と職員
3-4	2021年8月3日	Zoom	施設Y2の利用者15名と職員
3-5	2021年8月4日	LINE	施設Z2の利用者10名と職員
3-6	2021年8月5日	LINE	施設Xの利用者10名と職員
3-7	2021年8月6日	LINE	施設Rの利用者15名と職員
3-8	2021年8月6日	LINE	施設Q2の利用者10名と職員
3-9	2021年9月3日	LINE	施設Q1の利用者9名と職員
3-10	2021年9月7日	Zoom	施設Y1の利用者14名と職員
3-11	2021年9月7日	Zoom	施設Y2の利用者13名と職員
3-12	2021年9月8日	LINE	施設Z2の利用者9名と職員

リモートセッションの開始

そのようななか，2020年の5月に初めてのリモートセッションが施設Zで行われた．施設の行事や外出，個人の外出支援などが中止になるという状況で，利用者らがセッションの中止を残

念がっており，施設職員と浜田氏との間で，どちらからともなく「（リモートで）やってみる？」と話しがでたのだという（インタビュー 2021，以下同じ）．

しかし当初から，「リモートセッションを実施する」という明確な計画のもとにはじめられたわけではなかった．「来月は行けるかも知れないし，今月とりあえず LINE でやってみようか」「とりあえず，浜田さんだよ，行けなくてごめんね，みんな元気かい？だけでもいいじゃない」「1 回目は音楽がきこえるかどうかのお試し……聞こえるかどうかわからないけど」というスタートであった．こうして，施設 Z で第 1 回目のリモートセッションが行われた．

施設 Z は WiFi の環境が整っている，タブレット端末がある，などの条件がそろっており，IT の得意な職員が率先して設定を行った．トライアル的な要素の強い初回を経て，5 月末にはより本格的に実施することになり，比較的高齢の利用者と比較的年齢の若い利用者の 2 グループ（それぞれ「表 3」の Z1 と Z2）での実践もスタートした．

5 月末には施設 Z から発信されたリモートセッションの情報のもと，施設 Q からも試してみたいと職員から要望があり，施設 Q でも 6 月に第 1 回目のリモートセッションが実施された．施設 Y，施設 X，施設 R は WiFi 環境が整っていなかったが，施設の所長らが集まる会議のために整えられようとしていた時期でもあり，結局いずれの施設も 7 月にはリモートセッションの実施に至った．

こうして，新型コロナウイルス感染症の拡大以降，早い段階でリモートセッションの実施に至った C 社会福祉法人であるが，この背景にはある職員の尽力があった．その職員は法人の中でも最初にリモートセッションに取り組んだ施設 Z の職員であったが，リモートセッションを経験した後，同法人の他の施設にも「やっぱりこれみんなやった方がいいよ．続けた方がいいよ」とリモートセッションを勧めたのだという．そして彼が，他の施設にも赴いてリモートセッション実施のための環境設定などをサポートした．

また，施設 X の職員がノートパソコンのカメラに魚眼レンズをつければ浜田氏から利用者がよく見えるのではないかと意見を述べたり，施設 Q で LINE の接続がうまくできない日に Zoom でやれば良いのではないかと意見がでて Zoom に切り替えたということがあったりし，浜田氏は「ずっとやってきた中でこんなに職員さんたちから意見がでたことはないんじゃないかと感動した」という．

2-2. リモートセッションの環境

リモートセッションの通信環境や音声

とはいえ，リモート特有の問題もあり，浜田氏が「うまくいったり，いかなかったりはいまだに繰り返してます」と述べるとおり（2021 年 8 月 2 日），いつもスムーズにセッションが行われる訳ではない．たとえば「セッション 3-2（表 3）」は LINE で行う予定だったが，アップデートできず通話ができないと連絡が入り，別のアカウントで別のグループを作り直した．しかし「グループ通話ができない」と連絡があり，Zoom に切り替える．Zoom はつながったものの，施設

Z側の音声は浜田氏に聞こえるが，浜田氏の音声がZ施設側にきこえず，パソコンを変えて再スタートとなった．

また，浜田氏側から発する音声にも試行錯誤があった．たとえばLINEの設定に音質を変えられる機能がある．かといって高質の設定にすれば良いというわけではなく，セッションに使用する音楽がノイズとして処理されてしまったり，浜田氏の声がノイズとして処理されてしまったりしたため，ほどよいレベルを見出す必要があった．

音声という点では，楽器の選択も課題となる．対面のセッションではかなりの頻度で使用される鈴やトライアングルであるが，リモートセッションでは鈴およびトライアングルはほとんど使用されていない．「セッション3-6（表3）」の鈴を使用したセッションで浜田氏が「浜田さん鈴使うと音楽きこえなくなっちゃうかも知れないから鈴つかわないけど」と呼びかけたように，他の楽器とは異なり，リモートでは鈴やトライアングルの金属音が音楽をかき消してしまうのである．

また大きな変更点として，ミュージック・ケアでは基本とされている円の型が，学校で黒板に向かって座るような型になったことがあげられる．当初はミュージック・ケアらしさを持続しようと円の型で実践してみたものの，実際やってみると利用者から画面上の浜田氏の姿がみえないなどの問題があったため，教室式に変更となった．その後も，並び方によっては後ろの利用者が画面を見にくくなるなどの課題もあり，調整は続いている．

リモートセッションの「たのしみ」とは何か

「1-2. 音楽療法のリモートセッション」でも述べたように，セラピストや保護者が「リモートのセッションは無理ではないか」と懸念していたのと同様，施設Zの職員らも，普段からテレビを見入ることのない利用者が画面でのセッションに集中できないのではないか，ライヴでやっているということを理解できないのではないか，リモートのセッションはテレビ番組を見るのと同じではないか，などと懸念していたのだという（インタビュー2021，以下同じ）．浜田氏が，2020年の10月頃に各施設の職員にリモートセッションについてのアンケートを行った際にも，始められた当初はリモートセッションへの不安や，利用者がリモートではできないのではないか，といったネガティブな意見が多かったという．

だが同時に「やってみたらおもしろかった，という反応がぽつぽつとでてきていた」．「完璧なものが提供できなくても，これだけ利用者さんがたのしみにしてるんだから，やらない選択肢はないという雰囲気が2020年後半にはあった」という．そこで，浜田氏のセッションのどの要素が，「やってみたらおもしろかった」「利用者さんがたのしみにしている」という結果につながっているのか，「1-2. 音楽療法のリモートセッション」で整理した音楽療法のリモートセッションについての記述と照らし合わせながら，参与観察者の視点でよりミクロに探ってみたい．

2-3. リモートセッションの実際

画面を通したコミュニケーション

前章の「1-2」でも，障害児・者や高齢者が，周囲の予想に反してリモートセッションに参加できること，また予想を超えた積極的な様子をみせることに触れたが，浜田氏のセッションでも利用者らは浜田氏と活発にコミュニケーションをとっていた．

これには，浜田氏の力量も関係していると考えられる．たとえば「セッション 3-2（表 3)」では，1 曲のなかで「○○さんみえてるよ～」「△△さんもトントンいきますよ～」と複数の利用者に声をかけたり，前に出てきた利用者に「□□さんサングラスしてきたんだね，かっこいいね！」と声をかけたり，鳴子からバチに持ち変えることをよびかけた際には「次，バチの曲やるね．◇◇ちゃん鳴子片づけて，バチも出してる！浜田さん言ってること聞いてたんだね，空気よんでるね」と利用者の様子をすかさず肯定したりしている．

こうした浜田氏の利用者への声かけは膨大な数に及ぶため，ここですべてを書き記すことはできないが，利用者らもまた浜田氏に反応を示している．浜田氏によれば，セッションが 3 回目を迎える頃には，利用者らが「やりたい」「やる気がある」という顔をして待っていてくれる様子が画面越しにも感じられるようになったという（インタビュー 2021)．そこで次に，利用者らのリモートセッションにおける反応の事例を取り上げる．

東田さん（仮名）の事例

「セッション 3-5（表 3)」では，セッションの最初から東田さんという利用者が画面の前をうろうろする様子を見せていた．途中から画面の前にいた東田さんの姿が見えなくなっていたのだが，水分補給を兼ねた休憩中，浜田氏が「◎◎くん前に出てくれて嬉しかったけど東田くん追いやられてない？」と職員に声をかけると，「東田くん，◎◎くんをギューしちゃって（筆者注：手で掴んでしまって）今，上に行ってます」と返答がかえってきた．

しばらくして東田さんが部屋に戻ってくると，浜田氏はすかさず「東田くんおかえり！テンションあがっちゃったの？」と声をかける．東田さんが再び画面の前をうろうろするが，「おれの好きなやつ（筆者注：好きな曲の意味）かな～？」と職員のアテレコ的な声が聞こえてくることからすると，東田さんは自分の好きな曲を期待しているらしい．浜田氏は「東田くんなんかあるよね，なんかあるからそこにいるんだよね．なんだろう……バチやる？」などと呼びかけるが，東田さんはそれには答えない．

利用者や職員がバチの準備をするも，東田さんは楽器の箱を次々と片づけ，また別の利用者に向かっていってしまい，部屋を出て行ってしまう．しかしすぐ部屋に戻ってくる東田さんに浜田氏は「東田くんおかえり．近くでイライラするんだったら離れたところできいてていいよ．廊下とかさ」と声をかける．続けて，バチを使用する曲のあいだ，バチは手にしないものの，東田さんはずっと画面の前にいた．セッションの終了後，浜田氏は「東田くん，前は一緒にいられなかったのにずっと一緒にいられるようになったね．自分で落ち着けるようになったね．何かした

い曲があったら職員さんに相談しといて」と声をかけ，「職員さんもまた（東田さんの好きな曲を）リサーチしてみてください．親御さんに聞いたり」と職員にも声をかけた．

以下はセッション後の浜田氏のLINEのメッセージの抜粋である．

> 東田さんは，（現在）入所4年目くらいで，自傷・他傷行為があり集団活動をどうするか，職員さんと試行錯誤して取り組んで来た方です．……東田さんの好きな曲は，わりと早くに分かったんです．……曲に合わせて跳びながら，センター（筆者注：円の中心）や前に来てくれるので．でも，テンションが上がり過ぎ，不快になって，職員にも私にも，「助けて」と言ってるように感じるときがあり，落ち着けて気持ちの良い曲はないか？と．偶然かけた曲があたりました．それから2年半くらいほぼ毎回セッションのどこかで，（その曲を）みんなで聞きました．調子が悪いときは，（セッションの）最初に．良いときは（セッションの）終盤に．3年半くらいたって，施設Zの職員さんによるミュージック・ケアで，ついに，その曲はもういい，と言ってるように感じたという職員が表れ，私のセッションでも使わなくなっていきました．……そして，今日です．また，彼の気分に合う曲を模索していきます．

長期的に継続されているセッションにも，楽器を持とうとしなかった対象者がもつようになったり，円の中心に立つようになったり，などターニングポイントになる瞬間がある．浜田氏の言葉を振り返ると，このセッションは東田さんのターニングポイントとなったことがわかるが，重要であるのは浜田氏がそれを察知していることであろう．また，職員の「おれの好きなやつかな～？」という東田さんの行動へのアテレコ的な応答は，東田さんと浜田氏の双方に向けたものであり，東田さん，職員，浜田氏の三者がリモートで共にかかわった局面であると言うことができる．

大川さん（仮名）の事例

次に紹介する事例は，東田さんの事例にもあるように浜田氏のセッション全体を通してみられる，特定の対象者をセッションに巻き込む仕掛けである．「セッション3-6（表3）」では，大川さんがその対象であった．セッションが始まる前に，浜田氏は「大川くん，あとで《●●》か《▲▲》か，どっちがいいかきくから待っててね」と声をかけた．しばらく後に浜田氏が「大川くんおまたせ～，どっちがいいですか？」と尋ねると大川さんは「《●●》」と即答．浜田氏は「わかりました．《■■》と《◆◆》したら《●●》にするね．それまでお部屋で待てるかな？」と声をかけるも，その後は廊下に出ていってしまう．

いつの間にか部屋に戻っていた大川さんを確認し，浜田氏が約束の曲をかけると，大川さんは張り切って踊り，曲の最後にはいつもの振り付けにはないターンを入れてポーズを決めた．浜田氏は「大川くんさいご，ターン入れてくれたんだね．今度から採用するわ～！」と声をかける

も，曲が終わると同時に再び大川さんは廊下に出て行く．その姿をみながら，浜田氏は「（廊下に）いっちゃうんだね，いいんですよ」と声をかけた．

セッションが始まる前の，どちらの曲がいいかとの声かけは，セッション中に廊下を行き来する大川さんを引き留めるためのものである．事実，大川さんはリクエストの曲の最中は熱心に参加し，曲が終わると部屋を出て行っている．しかし，大川さんの即興的なターンは，自分でたのしむためのものでもあったかも知れないが，浜田氏にアピールしているようにも感じられた．浜田氏の，好きな１曲のあいだだけでもセッションに参加してほしいという意図を汲み取っての参加であったかどうかは定かではないものの，大川さんは浜田氏の呼びかけに応じ，浜田氏もターンを含め張り切っている様子の大川さんを受けとめていた．このやり取りもまた，画面越しのコミュニケーションが成立している事例である．

画面越しの無数のコミュニケーション

東田さん，大川さんの事例は，個人に焦点をあてたものであるが，いずれのセッションでもコミュニケーションは無数に成立していた．浜田氏が「センター争い」と呼ぶ，他の利用者や職員，および浜田氏に，もっとも見えやすい画面前の場所に複数の利用者が立とうとすることも，利用者・職員・浜田氏のあいだのコミュニケーションであると言えよう．

セッションの前後に画面の浜田氏と言葉を交わしたり，また言葉を発したりはしないものの，浜田氏とコミュニケーションをとるために画面前に立つ利用者も多かった．「セッション 3-10（表 3）」では，車椅子の利用者が職員に車椅子を押してもらいながら画面の前にやってくると，していたマスクをはずして画面上の浜田氏ににっこりと笑いかけた．言葉は伴わないが，彼女から浜田氏へ向けてのあいさつである．こうした利用者らの姿は，当初，職員らがリモートセッションに寄せていた，「画面でのセッションに集中できないのではないか」「ライヴでやっているということを理解できないのではないか」といった懸念を払拭するものであった．

対象者のリモートセッションへの集中

また，「1-2. 音楽療法のリモートセッション」でも，画面による「枠／フレーム」のために情報が限られることで障害児・者がリモートセッションに集中できるということについて触れたが，興味深いことに浜田氏もまた同様の見解を述べている．

新型コロナウイルス感染症の拡大以降に施設Ｚに通うようになった宮崎さん（仮名）のエピソードはそれを象徴するものであろう．施設Ｚのセッションに参加している宮崎さんは，浜田氏のセッションの経験はリモートのみである．自傷行為だけではなく他傷行為もあり，人間関係をスムーズに築くことの難しいタイプであったため，職員らはセッションに１時間同席することはできないだろうと予測していた．ところが，宮崎さんは初回のリモートセッションから１時間参加することができたのだという．その理由を浜田氏は「私のような，いるだけで圧力ある人いやだと思う．うるさいし．でも画面からはみださないから」と推測している（2021 年 8 月 6 日）．

「画面からはみださない」という浜田氏の表現は，前章で言及されていた「枠／フレーム」と同じ作用を指していると言える．そこで「枠／フレーム」について，ここでは松本敏治の著書（2020a，2020b）を参考に，より掘り下げてみたい．松本は両著で，自閉スペクトラム症（以下，ASD）のことばの学習過程，特に自閉症児が方言が話される環境で育っても方言を話さず共通語を話すという傾向に着目した．その際に松本が着目したのが「意図理解」である．障害のない子どもの場合，ことばのもつ意図の理解にもとづいてことばを習得する．しかし，ASDの子どもは意図の理解に困難がある．

より具体的に言えば，「ジュース」は「ジュース！」や「ジュース？」など，その発話のされ方により意味が異なるが，そうした意味を推測することができないというのである．一方，いつも同じように発話される，たとえばテレビでアナウンサーが毎朝繰り返す言葉や，同じビデオの再生などは，意図の理解をしなくとも同じように繰り返されるため模倣できる．そうして，結果的に自閉症児は共通語を習得していくのである．

松本は，方言を話すためには，ことばの持つ「社会的機能」を相手と共有していることが条件だとしているが，たとえば尊敬語などはことばの持つ社会的機能を代表するものであろう．ことばを話すということは，音を発するだけではなく，それが発せられている状況や発している相手の立場や感情を予測して理解しながら行うことでもある．自閉症児はそうした情報を取捨選択することが難しい，ということなのである．

松本は，ASDの人たちが意図を読むことが苦手な原因の一つとして，「表情・身振り・声の調子・視線など必要な社会的手がかりに着目できていない」ことをあげる（2020b，p. 120）．同時に松本は，「ASDがルーチンにこだわったりするのは，意図に問題を抱えているからかもしれません」と述べるが（2020a，p. 269），いつもと異なることや，毎回変わるようなことは，それがなぜなのか「意図」を読み取らなければ理解が難しい．障害の特性にもよるが，ルーチンにこだわる障害児・者は珍しくない．つまり，「いつもと違う」ことは理解できても，その違いが今ここに必要であるのか，またその違いの背景にある「意図」が何なのかを理解できないのだと言える．

このことは，障害のない者が気に留めない情報を，ASDの人々が切り捨てることができずに混乱してしまうということとも関係しているのかも知れない．たとえば，セッションでは必ず同じ服を着るようにするという音楽療法の実践者がいる．障害をもたない者であれば，実践者の服が前回のセッションと異なっていたとしても，その情報によってセッションが左右されることはないだろう．しかし障害児・者にとってはパニックの原因になったり，触ったり近くに寄って行ったりなどの固執の原因になったりすることもある．「意図」を推測できない障害児・者にとっては，その場の情報が過多となる場合もあるのである．

画面との距離

「（浜田氏が）画面からはみださないから」，参加は無理だろうと考えられていた宮崎さんがリ

モートセッションに参加できたことは，浜田氏が画面越しであることによって「表情・身振り・声の調子・視線など必要な社会的手がかり」がそぎ落とされ，宮崎さんにとっては程よい情報量であったということを意味しているのではないだろうか．

ミュージック・ケアには，自分の右手で左手を，左手で右手をマッサージする，オリジナル曲である《仔猫と知恵くらべのアリサ》という曲がある．この曲を，浜田氏の手を画面でアップにして写したことで，対面のセッションでは職員とのペアでしかできなかったにもかかわらず，リモートセッションでは一人でできるようになった利用者が何人もいるのだという．これも，浜田氏の「表情・身振り・声の調子・視線など必要な社会的手がかり」が画面上でそぎ落とされたことで，利用者が浜田氏の手のみを注視することができたからだと考えられそうである．

また，前章でも言及したように，小沼が対象者がリモートセッションに集中する理由に，「パーソナルスペースが保たれる事で集中しやすい」ことをあげていた．これも，浜田氏のリモートセッションにも共通する．先にも述べたように，ミュージック・ケアは参加者全員で「円」の型をつくることが基本とされているが，浜田氏のリモートセッションでは，画面が見にくいなどの理由から，画面に向かって教室のように椅子を並べるようになった．

筆者はリモートセッションの参与観察を続けるうちに，各自が程よい距離を選択できているのではないかと思うようになった．画面の近くに位置どる利用者にも，積極的に身体を動かしたり楽器を鳴らしたりする人と，そうではない人がいる．反対に画面から離れたところに位置どる利用者でも積極的な動きをする人と，そうではない人がいる．もちろん椅子から立ち上がって歩いたり，部屋から出ていったり，部屋の中を走ったりする利用者もいるが，居心地の良い参加の仕方は利用者によって異なるはずである．

また，先に述べた「情報の取捨選択」ということに関しても，円の型は利用者には情報過多であるかも知れない．他の利用者や職員らの姿，彼らの動きや物音が目や耳に入ってきてしまうからである．先に，ある曲の動作を，浜田氏の手を画面でアップにして写したことでリモートセッションでできるようになった利用者が何人もいると述べたが，手が画面上でアップになったことに加え，教室のような座り方になることで，「枠／フレーム」の浜田氏の手に注視しやすくなった可能性も考えられる．

2-4. リモートセッションにおける実践者側からの発見

ここまでは，対象者側からみたリモートセッションについて述べてきた．本節では実践者側にとってのリモートセッションについて述べたい．先述の『日本音楽療法学会誌』の特集では，「対面時と比較し，聴覚情報に自分がより意識を向けていることに気がつく」（小沼 2021，p. 44），「動けないことによって「定点観測」ができる機会ができたことは興味深く，リアルセッションで見逃しがちな気づきがもたらされた」（生野 2021，p. 36）などと報告されているが，それらについてそれ以上，詳細に語られてはいない．そこで本論文では，主に浜田氏へのインタビューや，浜田氏と筆者とのセッション後のやり取りから，実践者にとってのリモートセッショ

ンについて掘り下げてみたい．

「リアルセッションで見逃しがちな気づき」

「セッション3-4（表3）」のセッションで，W. A. モーツァルト作曲の《トルコ行進曲》にあわせて鳴子をならす取り組みがあった．《トルコ行進曲》はミュージック・ケアでは定番の曲であり，施設Ｙの利用者にも馴染みの曲の１つである．だがそれでも，全員が同じタイミングでピタリと動きを止めたときは鳥肌がたった．セッションの途中にも，走ったり，部屋から出て行ったりしている利用者もおり，また《トルコ行進曲》の最中も利用者によって鳴子の鳴らし方はそれぞれであったにもかかわらず，15名の利用者が一斉に動きを止める様は圧巻であった．

セッション終了後にそのことを浜田氏にLINEのメッセージで伝えたところ，浜田氏から以下の返信があった（2021年8月3日）．

> トルコ行進曲は，リモートでやってみた方が利用者さんの気持ちが分かるようになりました．対面のときは，音を鳴らさないでいて欲しいとか，ここで音が揃うといいな，という私のエゴが勝って（笑）利用者さんが，鳴らさないようにしようと思って楽しんでいるのが見えづらかったんです．……（利用者側が）ミュートにして行うことで，彼らがどうしたいのかは，よく分かり……彼らが音楽を楽しむ芯が見えてきた気がします．

これはつまり，対面でのセッションの際には，浜田氏は曲全体の完成度に意識が向いていたのが，利用者側のマイクがミュートになることで曲としての仕上がりではなく，個々の利用者の楽しむ様子や表情の方に注意を向けるようになったということだろう．浜田氏は利用者の様子を「ここで止めたいけど，止まらないこともある」と表現したが（2021年8月3日），障害のあるなしにかかわらず，身体を思うように使うことができずに，意図したように動けないことはある．そのようなとき，対面では「止まらない」楽器の音が耳に入ってくる．浜田氏には，それが不要なノイズとして感じられていたのだろう．だが，実は「ノイズ」を出しながらも楽しんでいた利用者の姿があったのである――「（動きは）止まらないけど，止まっている気分で，気持ちよくピアノソロを聞いているんだろうな，と」．

浜田氏は，実践者としての自分に「より音楽的にまとめあげたい」という「自己満足的な欲」，そして「対象者にこうあってほしいと強く思いすぎる」というエゴがあると述べた（2021年8月3日）．浜田氏はリモートでは，「いっしょにやって欲しいなどのエゴ」が利用者に届いていない感じを受けたという．いったん物理的な距離ができ，浜田氏が自身の「エゴ」に自覚的になったことで，利用者の音楽をたのしむ姿が立ち現れてきたのである．

リモートセッションでは多くの場合，カメラの位置が固定されているためすべてが画面に映らず，また拾われる音声も限られており，対面よりも情報が少なくなる．それによってわからないことやできないことがある一方で，情報が限られるからこそ認知されること（浜田氏の場合はた

のしんでいた利用者の姿）もあると言えよう．先に引用した，「リアルセッションで見逃しがちな気づき」が，リモートとなることで意識された事例である．

音楽療法のリモートセッションの今後の課題

以上，音楽療法では，対象者側にも実践者側にもリモートセッションのメリットがあることが確認された．メリットであると認識されているとはいえ，「枠／フレーム」が限定されることによる対象者の集中などは今後の検討が必要である．なぜなら，何かを出来るようになることが，音楽療法の目的ではないはずだからである．

日本音楽療法学会のホームページでは，「本学会は……音楽療法を医療，福祉，健康，教育の領域において積極的に展開することにより，音楽療法を通して健康の維持・促進など広く社会に貢献することを目的とする」と述べられている．また，日本ミュージック・ケア協会のホームページでは，「ねらい」に「音楽の特性を生かして，対象者の心身に快い刺激を与え，対人的な関係の質を向上させ，情緒の回復や安定を図ります．さらに，運動感覚や知的機能の改善を促して，対象者の心身と生活に好ましい変化を与えます」と記されている．

このように，技術や知識を得ることが音楽療法の目的ではない．より健康に生きたり，より良い社会生活を送ったりできるようになることが，目指されている．よって，「枠／フレーム」で出来るようになったことが対面でも出来るかどうか，「枠／フレーム」で活発になったコミュニケーションが対面でも応用されるかどうかは今後検討されていく必要がある．とはいえ，音楽療法の分野では今後，リモートセッションによるメリットがより積極的に追及されていくものと思われる．

リモートセッションの意義が認知される今となっては，これまで度々述べられてきた，音楽療法における録音の是非を問う議論は以前のような意味をもたなくなるかも知れない．しかし，リモートセッションが一般的になりつつある今だからこそ，かつて音楽療法における録音の使用がなぜ満場一致で賛成されなかったのかについて考えることは，音楽療法の核心を探求することにもつながると考えられる．

そこで次章では，「序」でも述べた「録音」をめぐる言説と（3-1），音楽療法における録音の使用をめぐる意見（3-2）を踏まえ，音楽療法の特性を考えてみたい．

3．音楽／音楽療法の「思い込み」

3-1. 録音をめぐる言説

「序」でも述べたように，音楽研究においてはアドルノの見解――一般の人々は「商品」を消費することしかできない存在――が長く影響力をもっていた．より具体的に言えば，多くの人々は，ごく限られた才能のある人がつくり出したものをただ受動的に受け入れるだけの存在と見なされてきたということである．これも「序」で述べたが，細川がこの見解に異を唱え，録音（当

時は主にレコード）による音楽経験があらたに意味づけられるようになった．細川はまず，アドルノが音楽の使用価値という概念をはっきりさせないまま，音楽が「商品」となることによって交換価値として「転落」する，と結び付けていることの矛盾を説き（1990，p. 158），そのうえで，生の演奏と，録音による経験の違いを検討している．

細川は，「経験の正統性，「ほんもの」という概念は，オリジナルの今・ここにしかないという性格によってつくられて」おり（1990，p. 153），一方，録音には「唯一無二の〈今・ここ〉がない」ことが，「常に差異的（微分的）な個別点として配分される」と分析している（1990，p. 193）．生の演奏では，ある作品は演奏されるたびに「異なる音響的現実」として演奏されるが，奏者・聴衆ともにそこに集う人々がこだわるのは「作品」の同一性である．一方，録音は再生されるたびに「同一の音響的現実」を生むが，再生される場や環境，聞かれ方はそのたびに異なる．細川は，「レコードにおいて再生産とはまさしく差異の生産である」と結論づけた（1990，p. 193）．

これは筆者の解釈であるが，つまり，生の演奏ではときに「作品」が再現されることが望まれるが，録音の再生はそれに限らずに音楽が使用される．たとえば同じ曲（細川の言葉で言えば「音響的現実」）であっても，静かな部屋で一人集中して聞き込むことや，大勢の集まりで雰囲気づくりのためにBGMとして使用することなど，経験のされ方や聞かれ方の意味は，その場に集う人々がつくりだしている．細川の提起によって，（アドルノの言う）「大衆」は，資本主義システムのなかで与えられた商品を受動的に消費するだけの存在から，録音の再生を能動的に意味づける存在へと位置付け直されたと言える．

3-2. 音楽療法における録音使用をめぐる言説

次に，音楽療法分野における録音をめぐる言説をみてみたい．まず前提として，一口に「音楽療法」と言っても，さまざまなメソッドや考え方があることを踏まえておく必要がある．世界中で支持されているノードフ・ロビンズ音楽療法のように即興演奏を主とするメソッドがあれば，主にクラシックの楽曲を聞くことを中心とするGIM（Guided Imagery and Music，H. ボニーが確立）というメソッドもある．そのなかでも，生演奏や即興演奏を不可欠と見なすメソッドや実践者が一定数いる．

たとえば，日本の音楽療法をリードしてきた，心理学者でもあった山松質文は，欧米の「心理療法」の形態をモデルとして，対象者と演奏者と心理治療者の三者によるセッションを基盤としていた．また山松は，欧米の療法の基本原理が「来談者中心 Client-centered」であるため，音楽療法においても対象者が中心になるべきであると考え，音楽は「子どものその瞬間瞬間の動きに応ずる」べきだと主張した（1975，p. 28）．こうした考えのもとでは，音楽は生演奏，しかもその場での即興演奏でなくてはならない．同じく，日本の音楽療法シーンを牽引してきた松井紀和も，「適応水準の非常に低い子どもにとっては，子どもの音楽，子どもの音に合わせていかなければならない」と主張している（2008，p. 113）．

J. アルヴァンの影響

よって松井は，実践者らに「（音楽を）少なくともアレンジする力，そのくらいの作曲技術は是非ほしいと思います」と呼びかけていたが（2008，p. 113），日本で演奏技術が重視された背景には，J. アルヴァンの影響も大きかったと考えられる．アルヴァンはイギリスで音楽療法の実践を行っていたが，彼女は著名なチェリストでもあった．1967 年の来日の際に行った講演および実践は日本の音楽療法に大きな影響を与えたが，彼女が著名な演奏家でもあったことで，音楽療法には質の高い生演奏が重要という認識を生み出していた．

日本の音楽療法を牽引していた一人，遠山文吉は，「アルヴァンさんの音楽療法の一ばんの大事なポイントは，〈生の音楽を演奏して子どもたちに聞かせる〉ということです．チェロでも歌でも何でもそうですが，生演奏を聞かせなさい，そして楽器に直接触れさせなさい，というのがアルヴァンさんのひとつの生き方でしたので，私もそれを大事にして行きたいと思っているのです」と述べている（2008，p. 5）．現日本音楽療法学会副理事長の土野研治もまた 20 代の頃に，アルヴァンの「音楽療法士はプロの演奏家でなければならない」という言葉に出会い，それを「音楽療法の本質」と受け止め，「音楽療法にとって音楽が重要な意味を持つならば，セラピストの音楽も常に磨かれるべき」と述べている（2014，p. vi）．

ある実践者は，「楽器が弾けないとダメかというと，そんなこともありません 」と呼びかけた後に，「実践現場ではアシスタントを使いますから，苦手なピアノが必要なら，だれかが弾けばいいわけです」と述べたが（笠嶋ほか 2001，pp. 170-171）．それほどに，一定のメソッドや実践者の間では，生の演奏が重視されてもいたのである．

音楽療法における録音使用の意義

だが，細川が生の演奏と録音の再生を比較し，それぞれがもたらす意味が異なることを明らかにしていたように，音楽療法もまた，何を目指すかによっては方法が異なって然るべきであろう．音楽療法における目的が達成されるためのルートは一つだとは限らないという方が正確かも知れない．

たとえば，同じくアルヴァンに影響を受けた栗林文雄は，自身も音楽大学を卒業し，演奏の技術をもちながらも，知的障害児を対象とした活動では，「現実の必要性に迫られて施行の結果選びとった方法」としてレコードの使用をあげている（2008，p. 33）．栗林は，「単純にレコードを使って効果の出るものではないのも事実」と注記しながらも，レコードの使用により「指導が画一的なものとはならず，むしろ子供たちの能力の育ちが十分に見られているという現実がある」と主張している（2008，p. 33）．

栗林は当該文献で，どのようにレコードを使用し，どのような「子供たちの能力の育ち」がみられたかについては具体的に述べていないが，細川が述べたように，どちらが優れているのかではなく，生演奏と録音では経験の意味づけが異なるのである．音楽療法においても，生演奏を用いたセッションと，録音を用いたセッションは，対象者がどのような特性をもつのか，そこで何

が目指されるのかによって意味づけが異なるのだと言えよう．加賀谷が，「誰と一緒にするか」に重きをおき，録音に尽力したことはすでに述べた通りである．

対面セッションの中止が余儀なくされ，リモートセッションが普及する状況においては，タイムラグの問題や音質の課題等もあわせて，再度，生演奏や即興演奏の意味が問い直されることと思われる．同時に，これまである部分では敬遠されてきた録音を使用することの意義も，捉え直される時期にきているのである．

一方で，次節で取り上げる，筆者が着目した音楽／音楽療法の特性は，生演奏か録音かによって異なるものではない．同時に，異なるものではないからこそ，その特性がより強く意識された事例である．

3-3. 音楽／音楽療法の「思い込み」

「セッション3-1（表3)」のセッションには，筆者が勤務する日本福祉大学子ども発達学部の4年生4名がリモートで参加していた．セッション後，学生にセッションの感想を尋ねたところ，1人の学生が「はじまりのあいさつは1人だけだったけど，おわりのあいさつには3人出てきてくれて，オンラインでも（ミュージック・ケアを）1時間ずっと一緒にやったから仲良くなれた気がした」と述べた．

浜田氏のセッションでは「はじまりのあいさつ」と「おわりのあいさつ」が行われるのだが，どちらも毎回，「あいさつしてくれる人？」と浜田氏が呼びかける．その日のセッションは，「はじまりのあいさつ」に立候補した利用者が1名，「おわりのあいさつ」に立候補した利用者が3名いた．見学者である学生たちに慣れたために「はじまり」よりも「おわり」のあいさつに立候補する利用者が増えたのかどうか，真偽のほどは定かではない．

音楽の「共有」

だが重要であるのは，学生がそのように感じた，ということである．筆者はある拙稿で，重度身体障害者のセッションの参与観察にもとづき，音楽療法を「共有のできる日常」と位置づけた（西島2019)．医療的なケアやリハビリテーションも，特に長期にわたる場合は「日常」の一部となりうるが，患者家族にとってはある程度までしか共有できないものでもある．それらと比べると音楽は，比較的共有のしやすい日常と言える．音楽は，ただBGMとして鳴っているだけでも，その拍子や旋律を相手も共有していると思わせられるからである．

しかし「共有」と言っても，どのように共有されているかはわからない．音楽は人々の心を一つにすると言われる．近年，S. マロック＆C. トレヴァーセン（2018）が提唱した「コミュニカティブ・ミュージカリティ」という概念が注目されており，生後まもない赤ちゃんも，養育者のマザリーズや歌，遊びなどに応答したりシンクロしたりすることが知られるようになった．だが，応答したからといって，自分と自分以外の他者がまったく同じ気持ちになっているかどうかは確かめようがない．日本の一般的な学校行事である合唱コンクールを考えても，何十人もの児

童・生徒が同じ気持ちになっているかどうかはわからない．しかし，同じ歌詞を同じ旋律で歌うことは，「みんなの心が一つになっている」と思い込ませる．

このような作用は，他の活動にはない，音楽活動に特有のものであると思われる．「音楽」ではなくとも，社員による社訓の唱和や，授業での音読，歓送迎会等で行われる「三々七拍子」や「一本締め」などにも同様の作用があるかも知れない．だが，発話や，拍子をあわせることのできない幼児や障害児・者，身体を動かすことのできない身体障害者であっても，少しでも手を動かすことができたり，わずかに顔をCDプレイヤーに傾けたりすると，私たちは「同じ音楽に反応できた」と，まるで「心が一つ」になったかのような気持ちになる．

「共有」という「思い込み」

この「思い込み」が実は音楽療法の核心でもあるのではないかというのが，筆者の6年にわたるフィールドワークの実感でもあった．筆者は別の拙稿で，施設や保護者らが音楽療法を取り入れたいと思う動機は，介護予防や機能回復などの具体的なもの以上に，たとえば障害や認知症などで言葉が通じにくいような相手とも，何かを共有することのできる，同じ世界に生きていてほしいという気持ちではないかと論じた（西島，2021）．

そう願うとき，音楽実践は，同じ歌詞をうたったり，曲にあわせて同じ動作をしたり，同じ曲をきいたりすることで，同じ時間や空間を共有していると「思い込み」やすいのである．上記の，学生の感想についてやり取りをした際に，浜田氏はそれを「ポジティブな思い込み」と表現した（2021年8月2日）．たとえば，ある対象者が実際の行動には至らずとも，やろうとする素振りを見せたり，楽器を鳴らそうとしたりすることがある．それらをすかさず褒めることが実践者の手腕でもあるが，浜田氏はそれが対象者のやる気につながるのではないかと述べる．

だが，そうした対象者の素振りも，実践者の「思い込み」である可能性はある．障害のない者同士であっても，相手の言動からすべてを理解することはできない．認知症患者や障害児・者のわずかな仕草や言動の解釈が正しいとは限らないだろう．だがセッションでは，それをあえてポジティブに捉え，「あわせようとしてくれてたね」「楽器もてたね」などという言葉で意味付与することで，対象者の次の行動やモチベーションにつなげるのである．

そして，これも別の拙稿で論じたことだが（西島2018），ミュージック・ケアはその場にいる人すべてを対象者と捉える．「すべての人」とはたとえば，障害児の保護者や施設職員であるが，対象者の生活の質（QOL）の向上のためには，生活にかかわる保護者や職員との関係が向上することが望ましいとの考えからである．

浜田氏は次のように述べた（2021年8月2日）．

> 私が（リモートセッションで）空気を感じるのも，利用者の想いや気分を推察するのも，ある種の「思い込み」かもしれません．ただ，私の思い込みを，私「たち」の思い込みにできるのが，ミュージック・ケアの面白いところ．

この浜田氏の言葉は2つの意味で重要である．1つは，リモートセッションでも対象者の「空気」や「想いや気分」を察し，「ポジティブな思い込み」にできるということ．もう1つは，「ポジティブな思い込み」を職員らと共有できるということである．

浜田氏は「空気」と形容しているが，実際には対象者のわずかな表情の変化や姿勢の変化，普段の様子とは異なる様子など，おそらく根拠はあると思われる．だが，複数の対象者が集うセッションでは同時にさまざまなことが起こるため，瞬時に判断が行われており，浜田氏自身が言語化できないのではないだろうか．とはいえ，リモートセッションを見学する筆者にも，浜田氏が「空気」を感じていると思わされることは幾度もあった．たとえば「セッション3-11（表3）」では，浜田氏が「皆さんお疲れ気味なので」「皆さんお疲れだから」などと呼びかけていたが，筆者にはどのような姿から浜田氏がそのように判断したのかわからなかった．このように，浜田氏がセッションの間に感じ取る「空気」は，その真偽は別として，セッションに参加している職員にも共有されうる．

「セッション3-11（表3）」で，浜田氏は「おわりのあいさつ」に，車椅子に寝たきりの状態で発話のできない利用者を指名した――「さいごのあいさつ，今日は春奈ちゃん（仮名）と春奈ちゃんに付いてくださってる職員さんにお願いしよっかな？ごめんね，職員さん，名指しして」．指名を受けた職員は車椅子を押して画面前までやってきた後，利用者らに向かって「これでミュージック・ケアを終わります」とあいさつを行った．当セッションの浜田氏の記録には，「（春奈さんは）おわりのあいさつでは，え，私なの？という感じだが，職員さんと一緒なので安心していた．職員さんのあいさつを嬉しそうにムフフと聞いていた」と記されている．浜田氏はこのことについて，筆者に次のように説明した（2021年8月3日）．

> 表情も読みにくい重心の利用者さんでも，スポットライトが当たると，にやり，としてる気がするので……職員さんにも，そうかもしれない，と思ってもらえるように，記録にムフフという表情に思えたことを書きました．思い込みに巻き込む感じです．

車椅子に寝たきりであることもあり，周囲の人には春奈さんがセッションをどのように受け止めているかわからないかも知れない．しかし，浜田氏がセッションのなかで春奈さんに役割を担ってもらうことで，春奈さんがよろこびを感じられているであろうこと，またそのよろこびには職員の手助けが不可欠であることを浜田氏は記録を通して職員に伝えている．浜田氏の発言にもあるように，春奈さんがよろこんでいるかどうかに関しては「思い込み」である可能性はある．しかしあえてポジティブなものと捉えることで，対象者や，対象者と共に参加する職員が，セッションに積極的な意味を見出すことにつながりうるのである．

音楽はモノではない．時間とともに流れ去るということは，手にとって確かめることができないということでもある．瞬時に消える音／音楽を媒体にしているからこそ，「思い込み」の余地があるとも言えよう．施設の職員にしろ，介護をする保護者にしろ，対象者らと生活を共にする

人々にとっては，何事かを，同じように感じられる，同じように経験できると「思い込む」ことが，共に生きる支えになることもある．音楽療法の時間以外にも，そうした瞬間はあるだろう．だが，身体の不自由な人や発話が得手ではない人との間でも，「思い込み」が生じやすいのが音楽／音楽療法の特性である．そしてその特性はリモートでも生じうることが，今回の参与観察から明らかとなった．

考察

これまで記述してきたように，音楽療法のリモートセッションには，「枠／フレーム」を超えて一般化できるか等の検討が必要とはいえ，実践者や保護者も予想していなかったメリットがある．これも先に確認したが，生演奏こそ「ほんもの」と見なす捉え方は音楽学や美学といったアカデミズムではすでに過去のものとなっている．だが，一般的には生演奏やライヴを真の経験だと見なす捉え方はまだ強いのではないだろうか．前章で確認したように，音楽療法においてはGIMのようなメソッドがあるものの，録音の使用はあまり歓迎されていなかった．青拓美は次のように述べている（2004，p. 13）．

> 未だ社会的にはイメージ先行で，例えば……「高齢者の施設で老人に録音された曲に合わせて鈴などの楽器で打楽器を鳴らす活動をさせたりすることでしょ？」などと考えられたりしています．ことに未熟な自称音楽療法士が音楽療法セッションボランティアと称して医療・福祉施設へ行き，施設の現状，地域性，対象者の事前調査もなく自己満足な活動を繰り広げ，現場の看護，作業療法，介護等のスタッフの顰蹙を買っている話は枚挙にいとまがないほどです．

青の言葉からは，録音を使用することは，専門職としての音楽療法士の姿にそぐわないという印象を受ける．換言すれば，音楽療法士が専門職として認知されるためには，その他の専門職にはない能力として，演奏技術を身に付けることが必要になると言えるかも知れない．だが，この背後には「音楽」の神秘的な力への期待が反映されていないだろうか．音楽療法関連の文献では，ダビデとサウルの引用をたびたび目にする．旧約聖書にある，イスラエルの王サウルの悪霊を竪琴ではらったダビデのことで，今から3000年前の逸話である．

音楽社会学者の井手口彰典は次のように述べている（2009，pp. 55-58）．音楽は発生した瞬間に消滅へと向かう儚いものである．だからこそ人々は，その魔術的な力を「何らかの似姿に縛り付ける」ことで所有しようとしてきた．レコードや楽譜が登場する以前の時代の「似姿」は「演奏する人間の身体そのもの」であり，とりわけ専門的演奏者である楽師は音楽の魔術的な力を体現する存在とみなされてきた．だが15～16世紀に楽譜が登場し，楽譜が魔術的な力の「似姿」となったことで，楽師から魔術的な性格を失わせた．

しかし，音楽療法の世界では，楽譜が神秘的な力をもちえない場合もある．対象者が全員そうだという訳ではないが，言葉によるコミュニケーションが得手ではない，発話ができない対象者も多い．そこでは，「記号」である楽譜が神秘的な存在と見なされない．それがために音楽療法の世界では，楽譜が登場する以前のように，「演奏する人間の身体そのもの」，つまり音楽療法士が「似姿」の役割を担ってきたのではないだろうか．だからこそ，音楽療法士には生演奏の技量が期待されてきたとも考えられるのである．

だが，新型コロナウイルス感染症の拡大により，魔術的な力の「似姿」がないままリモートによるセッションが行われ，また思わぬメリットが見いだされ，セッションの可能性が突如として拡大された．対象者も実践者も，「枠／フレーム」では同じように情報がそぎ落とされる．「枠／フレーム」はある意味，魔術的・神秘的な力をもそぎ落としたと言えるかも知れない．そのことによって，対象者と実践者の関係性が変わったり，これまでにはない取り組みが行われたりするだろう．

本論文では，ある言動の意味が，その言動を発する人に決定づけられるのではなく，それを受けとめる人とのあいだに生じるという「思い込み」の作用に着目した．これは，魔術的・神秘的な力を与える人と与えられる人との関係性とは異なる関係性である．こうした文脈においてまた，「似姿」としての楽譜や音楽療法士の意義は問いなおされていくものと思われる．この視点をもちながら，今後もリモートによる音楽療法の実践に目を向けていきたい．

付記

一部，現代では相応しくない表現があるが，引用であることを鑑みて原文のままとした．

謝辞

調査にご協力いただきました浜田陽子氏，ならびに社会福祉法人 C の皆さまに感謝申し上げます．

引用文献

青拓美，2004,「第 3 回学術大会公開討論会「音楽療法士の専門性を考える」音楽療法士の専門性について」『日本音楽療法学会誌』4（1），pp. 13-20

足立広美，2021,「保育者を目指す学生の『ピアノの弾き歌い』の指導法に関する研究（3）―オンライン授業における『ピアノの弾き歌い』の課題及び配慮するべき点についての一考察」『創価大学教育学論集』73，pp. 15-26

安藤江里，2020「学部教育におけるオンラインでの音楽指導の試み」『教育総合研究』4，pp. 237-248

生野里花，2021,「出勤できない音楽療法の臨床現場で経験したことと，そこから考えたこと―音楽療法は COVID-19 禍でどう変わるのか」『日本音楽療法学会誌』21（1）pp. 29-40

井手口彰典，2009,『ネットワーク・ミュージッキング－「参照の時代」の音楽文化』勁草書房

大木まみこ，2020,「音楽科教育の ICT 活用の現状―行政上の課題から見えること」『教育音楽小学版』75（1），pp. 30-33

大澤理紗，2021,「保育者養成校のピアノ指導における遠隔授業の実践と課題：2020 年度「音楽実技Ⅱ」

アンケート調査報告」『こども教育宝仙大学紀要』12，pp. 71-77
加賀谷哲郎，1972,『音楽療法』日本精神薄弱者愛護協会，p. 35
笠嶋道子・芹澤一美，2001,「著者インタビュー　音楽で伝える「I LOVE YOU」」『そのままのあなたでいい―音楽療法士が現場を綴る』一橋出版，pp. 155-178
門脇早聴子，2021,「オンライン授業における実技を伴う音楽科教育法の取組み」『教育学部紀要（教育科学）』70，pp. 73-81
栗林文雄，2008,「音楽療法の実際―弘済学園音感訓練教室の子どもたち」『障害児の音楽療法／親子関係』保田生命社会事業団編，日本図書センター，p. 32-47
小沼愛子，2021,「遠隔音楽療法：100% リモートワークの経験から」『日本音楽療法学会誌』21（1）pp. 41-45
齊藤忠彦，2001,「音楽科における遠隔授業の在り方とその教育的効果」『信州大学教育学部紀要』102, pp. 1-8
白川ゆう子，2021,「発達障害児に対する遠隔音楽療法―その意義と課題」『日本音楽療法学会誌』21（1）pp. 10-16
舘岡真澄，2020,「オンラインによる音楽演習の学習効果：教員養成課程における個別指導（レッスン）を通して」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』20，pp. 141-153
田中健次，2012,「音楽科における ICT の活用と教科書の行方」『音楽教育実践ジャーナル』9（2），pp. 75-82
田中功一・小倉隆一郎，2014,「モバイル SNS を活用したピアノ学習の試み」『音楽教育実践ジャーナル』11（2），pp. 52-59
土野研治，2014,『障害児の音楽療法：声・身体・コミュニケーション』春秋社，p. vi
遠山文吉，2008,「心身障害児に対する音楽療法の実践から―音，音楽を通してみた子どもたちの世界」『障害児の音楽療法／親子関係』保田生命社会事業団編，pp. 1-31，日本図書センター，p. 5
名郷泉，2021,「コロナ禍での音楽療法」『日本音楽療法学会誌』21（1）pp. 5-9
西島千尋，2018,「ミュージック・ケアのフィールドワークから考える音楽療法の意義―QOCL（クオリティ・オブ・コミュナル・ライフ）」『日本福祉大学社会福祉論集』140，pp. 39-66
西島千尋，2019,「ミュージック・ケアの事例から考える音楽療法における「たのしさ」の意味―重度身体障害者を対象としたセッションのフィールドワークをもとに」『日本福祉大学社会福祉論集』140, pp. 39-66
西島千尋，2021,「第１章　人はなぜ音楽療法をするのか―福祉現場のフィールドワークから」『音楽の未明からの思考：ミュージッキングの学際的研究』川瀬慈・野澤豊一編，アルテスパブリッシング，pp. 18-35,
初山正博，2014,「小学校音楽科教育における ICT の関わりと活用法」『音楽教育実践ジャーナル』11（2），pp. 27-33
日高まり子，2020,「リモートによる音楽科演習の一考察―Zoom を使った音楽の学修と評価」『宮崎国際大学教育学部紀要教育科学論集』7，pp. 90-100
平田紀子，2021,「音楽療法の継続における感染対策と多職種連携－施設・病院・自治体での実践例」『日本音楽療法学会誌』21（1）pp. 17-22
深見友紀子ほか，2010,「ピアノ弾き歌い学習における e ラーニング教材の効果」『京都女子大学発達教育学部紀要』6，pp. 35-46
二俣泉，2021,「特集によせて「どこでもドア」の向こうで，何をする？」『日本音楽療法学会誌』21（1）pp. 3-4
細川周平，1990,『レコードの美学』，勁草書房
松井紀和，2008,「障害児の音楽療法」『障害児の音楽療法／親子関係』安田生命社会事業団編，pp. 97-115，日本図書センター，p. 113

松本敏治，2020a,『自閉症は津軽弁を話さない―自閉スペクトラム症のことばの謎を読み解く』角川ソフィア文庫
松本敏治，2020b,『自閉症は津軽弁を話さないリターンズ―コミュニケーションを育む情報の獲得・共有のメカニズム』福村出版
S. マロック & C. トレヴァーセン編著，2018『絆の音楽性―つながりの基盤を求めて』根ケ山光一ら監訳，音楽之友社
山内信子，2021,「音楽教育におけるオンライン授業の可能性と課題：保育者養成の学生と教員を対象としたアンケート調査から」『聖和短期大学紀要』7，pp. 57-67
山松質文，1975,『自閉症児の治療教育：音楽療法と箱庭療法』岩崎学術出版社，p. 28

引用ホームページ

日本音楽療法学会 https://www.jmta.jp/about/outline.html（2021.10.1. 最終アクセス）
日本ミュージック・ケア協会 https://music-care.net/about.html（2021.10.1. 最終アクセス）